

第1課 「パウロとローマ」

*多くの偉大な信仰者たちが、「ローマの信徒への手紙」によって大きな影響を受けている。「まさしく新約聖書の主要部、特に鮮やかな福音といえる」(ルター)、「かつて書かれた最も深遠な文書である」(コールリッジ)、「キリスト教神学の最初の大著述である」(ドット)と語った。内村鑑三も最初にした註解書は「ローマの信徒への手紙」だった。そのテーマは、一言でいうと、「キリスト教の救いとは何か」ということであり、「ローマの信徒への手紙」は、単なる手紙ではなく、まさに「パウロによる福音書」である(ローマ1:1~17「福音」を印象づける)。

1. 書かれた背景

- **年代**：紀元57年～58年頃に書かれたとされる。おそらく紀元58年の初めの数ヶ月の間に書かれたと思われるが、他に紀元57年の春の早い時期、あるいは紀元57～59年の遅い時代に書かれたと考える神学者もある。
- **場所**：コリントのガイオ(パウロからバプテスマを受けた数少ない人のうちの一人。そしてコリント教会で導かれ、伝道し、やがて監督にまでなった。当時の教会で有力な役員であり、家庭集会などを主催していた人物)の家で書かれたのではないかとされる(ローマ16:23、1コリント1:14)。また、ケンクレアイ在住のフェベ(ケンクレアイ教会の女性執事であった。彼女は「多くの人々の援助者、特にわたしの援助者」であった。ケンクレアイはコリントの東にある港町。東方との貿易が行われていた。そこには貧しい人、やもめ、孤児、旅行者などが多くいて、教会はその人たちの世話をしていた)に「ローマの信徒への手紙」を託したであろうと考えられる(ローマ16:1~2)。
- **ローマ訪問への願望と執筆事情**：ローマ教会は当時、広くローマ世界に知られる様になっていた(ローマ1:8)。そして、信徒は様々な教理的、実践的な問題に直面していた(後述)。その事を聞くたびにパウロは一刻も早くローマを訪れて、彼らの必要に応えたいと強く思っていた。更に、当時における「世界」とは、ローマ帝国が治めるエリアを指していたこともあり、世界宣教を願う彼にとって大きな使命を感じるところであった(ローマ1:13~15)。しかし、彼には別の大きな責任があり、エルサレム教会と信徒を助ける為に献金を集め、携えてゆかなければならなかった(当時のエルサレム教会と異邦人教会の間には分裂の危機があった。この献金は交わりを改め、一致を促す意味があった)。そこで、ローマに行く用事があったフェベに、この手紙を託した(ローマ16:1~2)。パウロはテルティオに口述しながら少なくとも2日にわたって「手紙」を書いたと言われている。
- **パウロの働きと教会に期待する事**：パウロの主な働きは、①異邦人への福音宣教(教会の設立)②エルサレム教会と信徒に対する支援(経済的困難、周囲からの迫害、災害など)の為に献金を集める事(異邦人教会に対する偏見を取り除き、互いに助け合い、支えあう愛の共同体である事を示す)であった。私たちの教会は、積極的に福音宣教に携わり、教会のないところに教会を組織し(開拓伝道)、新しく生まれた教会や、助けを必要とする教会に積極的な支援を行ない(様々な方法が考えられる)、互いにキリストの体である教会として魂の救いを実現できる様に、祈りつつ奉仕する。

2. ローマ教会の実情

- **ローマにおけるパウロ**：神の御旨は時として私たちには理解できない導きをされる。パウロのローマ訪問も、およそ私たちの常識では考えられないような方法で、しかも確実にローマの主要な人々に福音が伝えられる方法が用いられた。それは、パウロが囚人としてローマに護送される事によってであった。パウロ自身この神の御旨を理解し、自らの事よりも福音宣教と魂に対する愛を優先させた。ローマの市民権を持つ彼は、決して不当な裁判をされる事がないように、その権利を有効に用いる。本来ならば無罪放免を期待するが、彼はそうせず、審判の場を宣教の場、信仰の証しの場と変えてゆく。また、正しい判断を求めながら、上訴することによってローマに赴きつつ、王や皇帝に対する宣教の場とする事を望んだ(使徒22:22~28:30)。パウロの晩年(殉教に至るまで)について、諸説はあるがわかってはいない。ルカの記述から、ローマ到着後2年間は自宅軟禁だったのは間違いない。その後皇帝の裁判があったかどうかはわからないが、ネロによる実の母親殺害は紀元59年頃なので、60年代には暴君に変貌していたと考えられる。パウロも投獄され処刑された可能性がある。紀元64年に有名なキリスト教徒の大迫害が起こる。この差し迫った危機感の中で、牢獄にいたパウロは、テモテとテトスに色々な支持を伝えたのではないだろうか(2テモテ4:5~18)。
- **ローマ教会の信徒**：「神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち」(ローマ1:7)＝神は互いに愛し愛される関係を求めておられる(ヨハネ13:34~35)。しかし、そうでなくても神は一方向的に愛して下さる。また、全ての人には神の招きを受けている。それに応じる者(献身した者)は、神と連なる者と認められ、用いられる。求める者は、それを受ける(マタイ7:7)。
- **ローマ教会の問題**：ローマ教会はユダヤ人と異邦人のキリスト者の混合で、自然発生的に生まれたと考えられる(聖書研究ガイド9p参照)。それ故に、正しい福音理解に基づく体系的な教育や訓練を受けていないため、教理的、実践的な問題が生じていた。
- **ローマ教会に対するパウロの確信**：パウロは、中心的指導者不在の教会でありながらも、神の福音を伝えられ、それを熱心に受け入れる者たちの中に、神が働かれる事実を確信した。そこには信仰と希望を持つ、善意ある、知識豊かな、互いに励ましあう信徒が備えられていた。故にパウロは、早くローマに行きたかった。神は、より素晴らしい成長を彼らのうちに現して下さる事をパウロは確信した(ローマ15:14)。